書評

早坂眞理 著
『近代ポーランドの固有性と普遍性――跋行するネイション形成』（彩流社、二〇一九年）

井出　匠

本書の著者である早坂眞理は、本邦におけるポーランド近代史研究の第一人者として、長年にわたり多数の論文や著書を発表してきた。本書はそのなかでも、とくに比較的初期の研究テーマであったアダム・チャルトリスキ公（一七七〇～一八六一、以下アダム公）を中心とする亡命ポーランド人たちの思想と行動にかんする論考をまとめたものである。著者は二〇一三年に『ベラルーシ――境界領域の歴史学』、また二〇一七年に『リトアニア――歴史的伝統と国民形成の狭間』（いずれも彩流社）という大著をたて続けに刊行しているが、本書はそれらに続くもので、著者の豊かな研究成果の集大成としての性格を有する著作であるといえる。その意味でも、本邦におけるポーランド史、またヨーロッパ史研究のなかで大きな位置を占めるであろう本書の内容については、すでにポーランド史研究者である福元健之が専門的見地から詳細に論じている（『史林』一〇三巻二号）。これにたいして評者は、近代東欧史の研究に従事してはいるものの、ポーランド史の専門家ではない。それゆえ、本書の記述における事実関係の子細な検証や解釈の評価に踏み込むことは、評者の能力の到底及ばないところである。そこで本稿では、本書を構成する各章の内容を紹介したうえで、そのなかでもとくにチャルトリスキ派の国家構想を著者が取り上げた意義について、評者なりの考えを最後に述べてみたい。

序章「ポーランド分割をめぐる歴史空間」では、本書の扱う範囲が一八世紀末のポーランド分割から一八四八年革命、クリミア戦争を経て一八六三年の一月蜂起までの時期であること、また本書の主要なテーマが、アダム公を中心とする亡命ポーランド人グループ「チャルトリスキ派」の立憲君主主義政治論であることが示される。著者は、当初は分割勢力の一つであるロシアに協力する立場を取りながらも、一八三〇年の一一月蜂起失敗を契機にパリに亡命し、同地にてポーランドの独立回復を目指す運動を指導したアダム公について、ポーランド近代史の「扇の要」に位置する存在であるとみなす。著者によれば、社会主義時代のポー

ランドの歴史研究においては、スラヴ的な農村共同体に由来するポーランド独自の国制とみなされたシュラフタ（士族）共和政を理想化する、共和主義史観が正統とされていた。これにたいして著者は、ポーランドの歴史学会が徐々に自由化していった一九六八年以降に注目されるようになったチャルトリスキ派の立憲君主政論に光を当て、亡命者を中心とする分割時代のポーランド近代史を読み直すことを本書の目的として掲げている。

序章で示されたポーランド近代史の解釈をめぐる問題は、第二章「ポーランド歴史思想史における楽観論と悲観輪」において、史学史的アプローチからより詳細に跡づけられる。著者が紹介する諸研究によれば、一月蜂起後のポーランド史叙述において、対立する二つの歴史観が確立した。すなわち、分割による国家消滅の要因を外国勢力の侵略行為に求め、独立回復のための武装蜂起の意義を強調する「楽観論」と、国内の混乱状態こそが外部の侵略を招いたとし、蜂起路線による国家再建の断念と分割支配下におけるポーランド社会の自己改革を求める「悲観論」である。このうち前者の系譜は、シュラフタ共和政を高く評価するロマン主義時代の歴史家ヨアヒム・レレーヴェルの共和主義史観に起源をもち、その影響下にあった亡命ポーランド人グループである「民衆派共和派」のイデオロギーに浸透した。そして一九世紀末には、悲観論を批判するワルシャワ歴史学派に継承されていった。これにたいして後者の系譜は、啓蒙主義時代のアダム・ナルシェヴィチに由来する君主政史観をその特徴としている。すなわち、シュラフタ共和政がもたらした無政府状態や排外思想を批判し、西欧的な立憲君主が主導する上からの改革を支持する立場である。亡命ポーランド人のなかではチャルトリスキ派がこの系譜に属するものとされ、やがて一月蜂起の敗北後にはクラクフ歴史学派を形成した。同学派の悲観論＝君主政史観は、楽観論＝共和主義史観に立つワルシャワ歴史学派の挑戦を受けたが、独立回復後の大戦間期には権威主義体制の下でポーランド史学の主流の座を占めた。しかし第二次世界大戦後の社会主義時代には、前述したように、君主政史観はその克服を目指す共和主義史観に取って代わられた。ただしこの両者はともに、各時代の政治状況における論者の立場や志向が反映されていた点で、同質であったとされる。したがって著者が目標としたのは、そうした政治的傾向性から自由な立場から、チャルトリスキ派の立憲的君主政論を捉え直すことであったといえる。

第三章「アダム・イェジィ・チャルトリスキ公のヨーロッパ構想」では、一一月蜂起以前のアダム公の国家構想が取り上げられる。旧ポーランド領で分割後にロシア領となっ

たリトアニアの大貴族チャルトリスキ家の出身であるアダム公は、若い頃にはロシア皇帝アレクサンドル一世に重用され、ナポレオン戦争期には事実上の外務大臣として、流動的な国際情勢に対処する重責を担っていた。したがってその立場は親ロシア的であり、当初はロシア皇帝を君主に仰ぐスラヴ諸民族の連邦国家を構想していたとされる。すなわち、分割勢力の一つであるロシアに働きかけ、その承認のもとでポーランドの一定の自立性を確保する、というのが当時のアダム公の基本路線であった。しかしながらその後、ウィーン体制下でロシア保護下の同君連合として成立したポーランド王国は、形式的には独自の憲法と議会を有する主権国家であったものの、実質的には皇帝の専制政治の支配下に置かれていた。とくに、専制志向の強いニコライ一世の即位後にはこの傾向が顕著となり、これに反発するポーランドの軍人や愛国者による蜂起が一八三〇年一一月にワルシャワで発生した。アダム公は、そのさいに樹立された国民政府の首班に就任したが、やがてロシア軍によって蜂起が鎮圧されると国外に亡命した。

アダム公をはじめ、一一月蜂起に参加した一万人もの人々が亡命した七月王政下のフランスは、ポーランドの政治的独立の回復を目指す運動の中心地となった。第四章「大亡命：対決の時代――アダム・イェジィ・チャルトリスキ公vsニコライ一世」では、この亡命者集団（大亡命）の動向が跡づけられる。かれらの内部には、二つの異なる政治路線が存在した。啓蒙主義的な大貴族層を支持基盤とするアダム公を領袖と仰ぐチャルトリスキ派は、立憲君主政を志向し、またおもに外交工作によって国際社会の承認と支援を取り付ける戦略をとった。これにたいし、前述のレレーヴェルを理論的指導者とする中小貴族層のグループである民衆派共和派は共和政を標榜し、民衆層と提携しつつ武装蜂起に訴える道を模索していた。ポーランド史学史の観点からすれば、チャルトリスキ派に属するカロル・ホフマンの君主政史観にたいしてレレーヴェルの共和主義史観が対置され、それぞれがポーランド国民史叙述の基本を確立していくこととなった。ただしチャルトリスキ派の路線も終始一貫していたわけではなく、民衆派共和派に対抗するために、一時期はシュラフタを中核とする蜂起路線を掲げるマウリツィ・モフナツキとの提携を図っていた事実も明らかにされる。

本書の副題である「跛行するネイション形成」とは、チャルトリスキ派のこうした試行錯誤を象徴的に表現する言葉であるといえる。続く五つの章では、同派に関係した個別の人物たちの思想や行動、国家構想などが焦点となる。第五章「チャルトリスキ派とカロル・ホフマンの歴史研究」

では、レレーヴェルと同じく一八三〇年代のロマン主義時代に活動した歴史家である前述のホフマンが取り上げられる。彼は、封建的身分であるシュラフタの独占的支配体制こそがポーランドの混乱と衰退を招いたと考え、シュラフタと農民の連合のなかに独立闘争の主体としての姿を見出すレレーヴェルの共和主義史観を否定した。そのうえで、ポーランドではなお未発達であった都市住民層が成熟し、王権を支えつつ自由主義改革と経済的発展を推し進めていく西欧的な立憲君主政を評価した。著者は、このホフマンに代表されるポーランドの君主政史観について、亡命地フランスの七月王政下という国際環境のなかで展開されたチャルトリスキ派の政治運動のなかから成熟したものであった、としている。

第六章～第九章では、アダム公の外交政策の一環として、当時オスマン帝国領であった南東欧を舞台に、一八四〇年代から六〇年代にかけて様々な工作活動に従事した人々の事跡に焦点が当てられる。かれらの活動の内容と方向性は多様であったが、ほぼ共通しているのは、南東欧をめぐるロシアとオスマン帝国の対立関係を利用し、後者と提携を図ることで同地域におけるロシア支配の除去を目指した点、またその後に実現されるべき国家的再編の青写真として、共通の立憲君主を戴く諸民族からなる連邦国家を構想していた点である。その概要は第六章「亡命ポーランド人の東方バルカン政策」で示されるが、そこではチャルトリスキ派の東方政策との関連で生み出された様々な連邦構想が紹介されている。すなわち、オスマン帝国領におけるポーランド人工作員グループ「東方機関」を統括していたミハウ・チャイコフスキによる、アダム公を国王とするポーランド・ウクライナ連邦構想、チャルトリスキ派に近いフランス人スラヴ学者でコレージュ・ド・フランス教授を務めたシプリアン・ロベールによる、ポーランドを盟主とし中欧やバルカンのスラヴ諸民族を含むスラヴ連邦構想、一八四八年革命の過程でチャルトリスキ派とハンガリー革命派との連携が図られるなかで浮上した、スラヴ諸民族とハンガリーから構成されるドナウ連邦構想などである。その後の歴史的経緯からみれば、これらの連邦構想はいずれも実現することはなかった。しかしそれら自体が、目まぐるしく変化する時代状況や国際関係に即応しつつ、ポーランドの政治的独立の回復という最終目標に向けて様々な国家再編のあり方を模索した、チャルトリスキ派の足跡を如実に示しているのである。その意味で、それらはまさに「跛行するネイション形成」を体現するものであったといえよう。

続く第七章「ミハウ・チャイコフスキのウクライナ思想」

では、前述のチャイコフスキの事跡が取り上げられる。チャイコフスキは旧ポーランド領のポドレ地方（現ウクライナ西部）のシュラフタ出身であったが、祖先にウクライナ（ザポロージェ）・コサックの首長がいたことから、コサックに体現される「ウクライナ民族社会」の固有性を主張するようになった。そのうえで、それがポーランド王権の下で連邦国家の一部を構成するという構想を抱いていた。チャルトリスキ派の東方政策に協力するべく、オスマン帝国の有力者との結びつきを強めたチャイコフスキは、ロシアとオスマンとのあいだで開始されたクリミア戦争にさいし、オスマン領内のコサックや亡命ポーランド人などからなるコサック連隊を編成した。しかしやがてムスリムに改宗したのを機にチャルトリスキ派から離れ、最終的にはロシア皇帝に臣従するという数奇な生涯を送った。

第八章「〝ロシア人はスラヴ人にあらず〟――フランチシェク・ドゥヒンスキの人種理論」では、反ロシアの立場から特異な人種理論を展開したドゥヒンスキに焦点が当てられる。チャイコフスキ同様ウクライナのシュラフタ家系の出身であるドゥヒンスキは、チャルトリスキ派の路線に従い、ポーランド人やウクライナ人などを強力な王権の下に糾合するスラヴ連邦構想を唱えていた。そしてそのなかで、宗教観や法体系などを根拠としつつ、ロシア人はスラヴ系には属さず、フィン・ウゴルやタタール・モンゴルの血を引く野蛮なアジア系人種であるとする理論を打ち出した。この主張には、南東欧のスラヴ諸民族にたいする支配を正当化するロシアの汎スラヴ主義への対抗という側面があったが、著者はドゥヒンスキのこの人種主義が、のちのウクライナ民族主義にみられる極端な排外性に影響を与えたと指摘している。

第九章「トルコ・アーリア主義――コンスタンティ・ボジェンツキの政治思想」で取り上げられるボジェンツキは、本書に登場する個性豊かな亡命ポーランド人のなかでも、おそらく最も異色の存在である。彼はロシア領ポーランド西部の小地主の出身であり、一八四八年にプロイセン領ポーランド（ポズナン大公国）で発生した蜂起に参加したのち、フランス亡命を経て東方機関の工作員となった。そしてオスマン帝国軍の将校としてクリミア戦争等で活躍するうちに、ポーランド独立の大義よりもオスマン帝国そのものに忠誠心を抱くようになり、ムスリムに改宗してトルコ・アーリア主義という思想を掲げるに至った。これは、宗教的にはムスリムでありながら人種的にはヨーロッパ人と同じアーリア人であり、かつトルコ語を話す民族集団でもあるトルコ人のみがオスマン帝国の政治的ネイションたりうるとする考えであり、宗教や出自にかかわりなく帝国

への帰属意識と王朝への忠誠心を有する市民の創造を目指すオスマン主義や、宗教のみに根差したムスリム共同体理念を否定するものであった。そしてこのボジェンツキの思想が、のちの青年トルコ党やケマル・アタチュルクにみられる近代的トルコ・ナショナリズムの先駆けをなしたとされる。ヨーロッパで発展した言語・文化的ナショナリズムをトルコに輸入する役割を担ったのが、もとは亡命ポーランド人であったボジェンツキであったという事実には興味深いものがある。

これに続く三つの章では、チャルトリスキ派と対抗関係にあった民衆派共和派に属する人物たちに焦点が当てられる。したがって本書の主題からはやや外れてはいるが、しかしそれとの対比において、多彩な亡命ポーランド人社会の全体像を捉えるうえで不可欠な部分であろう。まず第一〇章では、近代的な民主主義理念を伝統的なシュラフタ愛国主義と結びつけ、共和主義的な愛国主義を掲げた民衆派共和派を代表する存在であるルドヴィク・ミエロスワフスキが取り上げられる。続く第一一章では、当初は農民解放による社会革命と蜂起路線によるポーランド再建を訴えていたものの、のちに一転してロシアとの宥和を説く至ったヘンリク・カミェンスキの思想遍歴が主題となる。さらに第一二章では、やはり社会革命を志向してロシア・ジャコバン派と関係をもち、またピウスツキ率いるポーランド社会党革命派の結成にも関与したカスペル・ミハウ・トゥールスキが取り上げられている。著者によれば、一九世紀ヨーロッパの共和主義の伝統は、トゥールスキを介してポーランド社会党革命派に伝授され、のちの第二共和政の誕生に連なっていくとされる。

民衆派共和派が掲げた農民解放は、ポーランド独立回復運動の社会的基盤にかかわる重要な問題であり、どのような立場を取るにせよ避けられない論点であった。そこで続く二つの章は、農民解放にかんする穏健改革派の議論の検証に割り当てられている。第一三章「有機的労働論――農民解放をめぐる論争から」では、ポーランド近代史学において蜂起路線の対極にあるとされる「有機的労働」をめぐる議論が紹介される。有機的労働論とは、蜂起をはじめとする性急な武装闘争に訴える代わりに、経済活動や教育・文化活動を通じてポーランド社会の発展を平和裡に実現していくことで、将来的な自立につなげていこうとする考えを指す。農民を領主にたいする隷属状態から解放し、土地を与えて「市民」の地位に引き上げることは、その前提となるべき措置であるといえる。したがって民衆派共和派のみならず、蜂起路線を否定し穏健で漸進的な改革路線を追求する有機的労働論者にとっても、農民解放は喫緊の課題

であった。一八五七年に設立された「農業協会」は、おもに大土地所有貴族からなる穏健改革派を代表する機関である。そこでは農民解放の方針が議論されたが、解放は有償とされ、賦役領主制も当面は維持されるなど、その内容は概して地主貴族に有利なものであった。続く第一四章「歴史は生活の師――道化師たちの精神的指導者ヴァレリン・カリンカ」では、チャルトリスキ派に属した歴史家で、前述のクラクフ歴史学派の創始者となったカリンカの農民解放論が取り上げられる。それは、地主貴族と農民が互いに協力しつつ、前者が主導する形で有償の農民解放を進めることで、有機的労働と自立した農民経営によるポーランド市民＝国民意識の形成が進展するというものであった。カリンカのこの主張は、ハプスブルク皇帝の下で実質的な自治を享受していたオーストリア領ポーランド（ガリツィア）の保守主義グループ「道化師たち」に継承されていった。

以上、チャルトリスキ派を中心に亡命ポーランド人の足跡を辿ってきた著者は、終章「世界史に連動するネイション形成」において、本書の叙述を貫くテーマである「跛行するネイション形成」という問題について触れている。著者によれば、ネイション形成は一律に進行するものではない。ポーランドの場合、それは「跛行的であるゆえに、（…）様々な連邦制や国家連合などの組み合わせによる解決が模索され、そうでない場合は大国・列強の帝国的再編に身を委ねる選択肢もあった」（三五八頁）という。本稿ではその概要を紹介してきたのだが、以下ではあらためて、著者がこの問題に着目しつつ叙述を展開したことの意義について考えてみたい。

ネイション形成にかんする著者の理論的前提は、一九八〇年代以降に定着したいわゆる構築主義を踏まえたものではなく、近代以前に存在した「民族集団」が一定の歴史的段階において近代的な「政治国民」に成熟していくという、一種の古典的見解に沿ったものである（七七頁）。ただし近年では、構築主義に立つネイション形成論でさえも、最終的にはネイションが特定の形態を伴いつつ完成体に至るという、直線的・目的論的な発展モデルになおも依拠しているとの批判がなされている。すなわち、ネイション形成の方向性はけっして定まったものではなく、ある時点を切り取ってみれば、そこには様々な方向に展開しうる可能性が常に存在していたという事実を捨象すべきでない、ということである。この観点からすれば、著者がチャルトリスキ派の多様な国家構想に着目し、そのなかに時代状況に応じたネイション形成の「跛行性」を見出したことの意義は殊に大きく、またそこに本書の表題である「近代ポーランド史の固有性と普遍性」を認めることも可能であ

るというべきであろう。著者は（ナショナリズム研究にありがちなことだが）理論的アプローチから入るのではなく、数多くの史料を分析し比較するという地道な作業を通じて右の見解に達したのであり、この姿勢は歴史研究者として大いに見習うべきであると考える。

（福井大学教育学部准教授）

※追記

著者の早坂眞理氏は、昨年（二〇二〇年）一二月に逝去されました。故人のご冥福をお祈りするとともに、本稿をもってその業績を偲ぶ一助とすることができれば幸いです。